

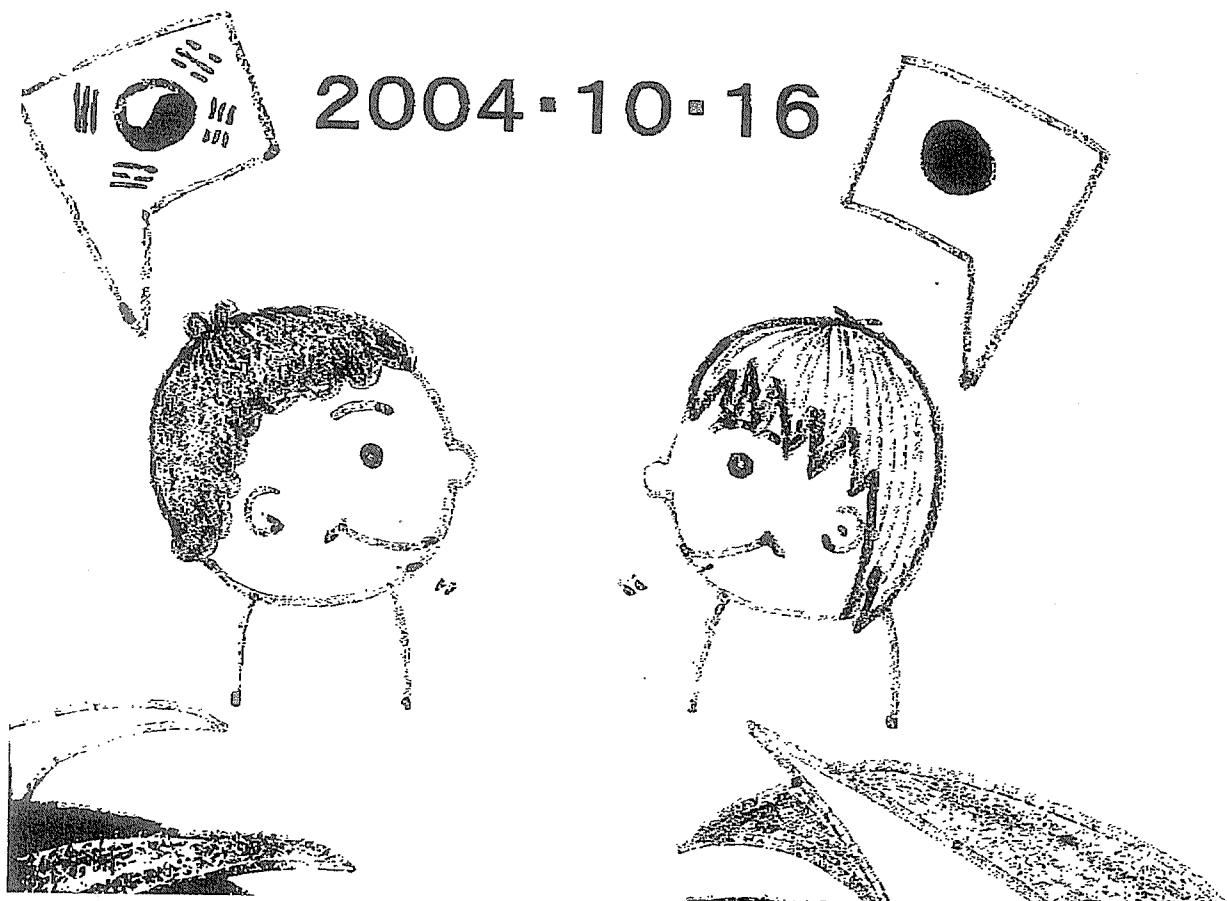
韓日共同ディベート

日本海・東海

名称問題を考える

報告文集

2004・10・16



目次

はじめに

謝辞

活動経緯

当日の流れ

日本海・東海の名称問題について

ディベートとは

肯定側メンバー&立論

否定側メンバー&立論

議事録講評

参加者感想

　　浅井 遼 (1年)

　　足田 利伸 (4年)

　　石原 司 (4年)

　　姜 昭淑 (3年)

　　佐藤 恵 (2年)

　　高橋 隆太 (3年)

　　寺脇 史人 (4年)

　　馬場 茜 (4年)

　　前田 啓介 (4年)

　　室屋 友則 (1年)

　　尹 黑峻 (4年)

　　渡邊 郁夫 (1年)

おわりに

資料

はじめに

まず、10月16日に私たちの『韓日共同ディベート』にお越し頂きました方々に心からお礼を申し上げます。大学祭の初日に朝早くにも関わらず70人もご出席していただきました。また、ディベートが終わってから、多くの方から励ましのお言葉を頂きまして、私たちが次のために頑張る力になりました。真にありがとうございました。

私たちは今年5月に、ディベート倶楽部「QCLC」とアンヨンハセヨ韓国文化研究クラブ、そして韓国の留学生が問題意識を持ち集まりました。最初にこのような企画を考えるようになったきっかけは、日本と韓国が抱いている歴史・外交的な問題を学生の立場から、相互理解できる範囲まで考えてみたかったからです。そして、それを通してもっと多くの方

がこのような問題を他人のことだと考えずにみんなで話し合う輪を作りたいと思ったからです。

もちろん、日本海・東海の名称問題は竹島問題とともに両国の間の外交的な問題として、もっとも敏感な部分です。そういう理由で、私たちがこの問題を取り上げようとした時、周りから目に見えないプレッシャーと心配の声があったのも事実です。しかし、誰もが同じ考え方と思想をもっているなら、この世の中はいつになんでも変わることはありません。むしろ、固定観念から脱出することによって新たな発想と思想が生まれると思います。つまり、今回の企画も周りからみんなが懸念するからこそ、私たちにはチャンスであり、使命感を強くもてたと思います。

私は最近一つ強く感じたことがあります。それは、愛国心という定義です。私が韓国にいたときに、身についていた愛国心というのは、どんなことがあっても国のことを見守る、そして、国のモノを愛する、それに、国の勝利のために頑張る。言い換えれば、盲目的な愛国心でした。しかし、今回の企画を進めるうちに、その愛国心に対して、もう一度考えるようになりました。果たして愛国というのは何か。私はいろいろと資料を探し、メンバーたちと熱く議論するうちに一つ悟ったことがあります。それは、私が愛国ということを考えているとき、相手もそれぞれの愛国心を持っていることを忘れてはいけないということです。つまり、盲目的な愛国心では相手はもちろん、自分さえ傷つけることがわかりました。それは、つまり対立の連続とつながることでした。

その対立を防ぐためには盲的に国を愛するのではなく、賢明な愛国心が必要です。それは、自分のことはさることながら、相手も知ろうとする前向きな姿勢と、相手のことを尊重しあうこと、そして、間違ったら間違ったと認める広い心から始まると思います。

今回の企画をきっかけにもっと多くの方、特に島根県立大学の後輩たちが日韓だけではなく、日中・日米関係などの問題意識を高め、みんなで話し合える輪を作ってほしいです。それは、今回の企画に参加した学生たちの最後の意見であり、願いあります。

これからも私たちの活動を暖かく見守っていてください。

ありがとうございました。

2004年10月23日

韓日共同ディベート総合責任者 尹熙燮

謝辞

2004年10月17日の第5回海遊祭において、韓日共同ディベートは、約70名の観客を集め、当初の目標であった「韓国と日本の間に存在する、問題の関心の輪を広げる」を達成でき、大変嬉しく思っています。

しかし、本企画の成功には多くの人たちのご支援と叱咤激励があったからだと考えております。我々参加者一同を育ててくださった御家族、傍で支え、相談にのってくれた多く

の友人たち、我々に学問の尊さを教えて下さった宇野学長を始めとした本学の先生方、ディベートのご指導をしてくださった松本茂先生、ディベート俱楽部「QCLC」の顧問である浅野雅巳先生、アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブ顧問である朴容寛先生、私たちの企画に興味・関心を持ち、松江から視察に来てくださった小松電気産業株式会社社長の小松昭夫様、また最後まで本企画を追跡取材してくださった山陰中央新報社の田中輝美様、リサーチ・打ち合わせ場所を提供してくださったメディアセンターの皆様、レジュメ・本誌の印刷にご協力してくださった赤松裕作君と売店の皆様、食事会の場所を快く提供してくださった「居酒屋きんさい亭」の皆様、我々の活動の場である第5回海遊祭を成功させてくださった実行委員会の皆様、そして、当日会場にいらっしゃったお客様の皆様。誠に参加者一同、心より厚く御礼を申し上げます。

また、私たち4回生が卒業した後も、後輩たちがこのような企画を続けていくと思います。彼らも私たちと同じように、多くの方のご支援が必要です。ですから、皆様からの一層のご指導、ご支援、叱咤激励を彼らにも賜りますようお願い申し上げます。

2004年10月23日

韓日共同ディベート 運営責任者
ディベート俱楽部「QCLC」部長 寺脇史人

今日までの活動の経緯

- ・ 2004年5月上旬 尹熙峻がディベート俱楽部に企画を提案。
- ・ 2004年5月中旬 韓日共同討論会の企画に韓国人留学生（尹熙峻・姜雨淑）アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブ、ディベート俱楽部、一般有志（室屋友則・渡邊郁夫）が集まる。
- ・ 2004年6月上旬 ディベート俱楽部「QCLC」によるディベートの指導と練習。
- ・ 2004年10月1日 肯定側・否定側のチーム編成が決まり、本番までチームごとで調査・練習。
- ・ 2004年10月6日 小松電気産業 社長 小松昭夫氏の活動視察と懇親会。小松昭夫氏より『北朝鮮年鑑2001』『北朝鮮2000』を寄贈していただく。
- ・ 2004年10月16日 第5回大学祭 韩日共同ディベート「日本海・東海の名称を統一すべきか、否か」を開催（来場者数 約70名）。
- ・ 2004年10月18日 県立大学メディアセンターに小松昭夫氏から『北朝鮮年鑑2001』『北朝鮮年鑑2000』を寄贈。
- ・ 2004年10月26日 韩日共同ディベート報告文集が完成。

当日の流れ

【司会・議長：寺脇史人（4年） 議事録：石原司（4年）】

1. 開会
2. 日本海・東海の名称問題のレクチャー
3. ディベート・レクチャー
4. 公開ディベート 「日本海・東海を統一すべきか、否か」
5. 判定・批評 （勝者：否定側）
6. 企画立案者 尹熙媛あいさつ
7. 閉会

—日本海・東海の名称問題について—

文責：アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブ

前田啓介・高橋隆太・佐藤恵・浅井遼

・ 名称問題の発端

現在、世界的に認知度の高いとされる「日本海」という表記・呼称をめぐり、日韓で論争が起こっている。1992年、第6回国連地名標準化会議において、韓国が初めて「日本海」に対して異議を唱え、「東海」と改めることを公式要求。その後、韓国側が併記論を展開するも、日本はこれに反対している。

歴史的観点より「日本海」と「東海」どちらの表記が早かったか、他国ではどちらが多く使われているかなど、両国政府間で論争が続いている。

2. 日本側・韓国側の主張

○ 日本側の主張・・・「日本海」単独表記維持を主張。

- ・ 1602年、イエズス会のマテオ・リッチによる『坤輿万国全図』で最初に登場した。
- ・ 19世紀以前には、既に「日本海」の呼称が世界的に確立されていた。
- ・ 2000年、外務省が世界60カ国の地図392枚を調査した結果、97%以上が英語での”Sea of Japan”および日本語での「日本海」に呼称を使用している。

○ 韓国側の主張・・・「東海」、あるいは「東海／日本海」のような併記を主張している。

- ・ ユーラシア大陸の東側に位置している。
- ・ B.C.37年（三国時代）、既に「東海」の記録があることから、2000年もの間使われてきたことを主張している。
- ・ 1809年および1871年の世界地図に、日本人の地図作成者による「朝鮮海」の表記を認める。

- ・ 1929年、国際水路機関（IHO）による『海と海洋の境界』初版発刊の際、韓国は日本統治下にあったため意見できなかつた。

3. 名称問題をめぐる混乱

- ・ 中国・ベトナムは、東シナ海・南シナ海をそれぞれ「東海」と呼称しているため、「日本海」を「東海」と記載することは、混乱を招くことになる。
- ・ 関係国以外の国の表記・呼称が、関係国から指摘され非難されるという現状。

以上

—ディベートとは—

文責：ディベート俱楽部『QCLC』副部長 足田 利伸
 赤松裕作 石原司 小田久美子 寺脇史人 馬場茜
 浅井達 姜暉淑 佐藤恵 室屋友則 渡邊郁夫

ディベートとは…

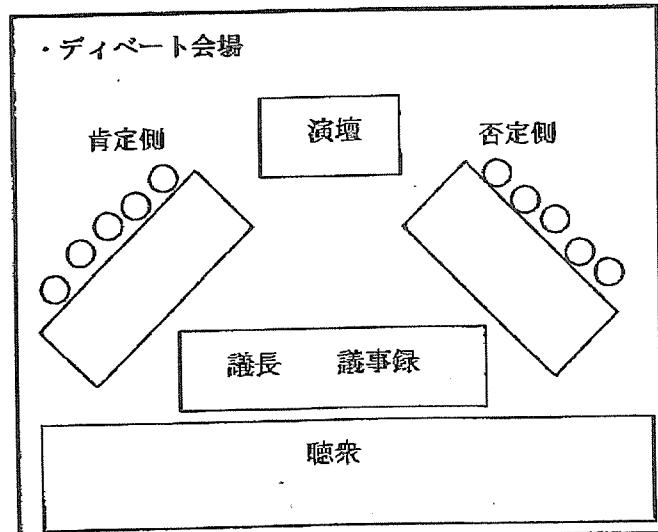
一つの論題に対して、対立する立場をとる話し手が、聞き手を論理的に説得することを目的として議論を展開するコミュニケーションの形態。

・ ディベートの構成要素

1. 論題
2. ディベーター（対立する立場をとる話し手）
3. 聞き手

・ ディベートの進行形式

肯定側立論	4分
否定側質疑応答	2分
準備	1分
否定側立論	4分
肯定側質疑応答	2分
準備	1分
自由討論形式の反駁	20分
計	34分



・ ディベートの仕組み

立論：自分たちの立場を擁護する全ての重要な議論を提示する。

- ・ 肯定側立論…プラン（論題を具体的にしたもの）を導入すると、新たなメリットが

生じるという議論を展開する。

- 否定側立論…論題を採択すると新たなデメリットが生じるという議論を展開する。

質疑応答

- 不明な点の確認…議論の構造の確認、聞き漏らしたことの確認をする。
- 反論・反駁のための土台作りをする。

反駁：主な目的は、自分たちの議論を立て直すこと。

- 相手側の議論に反論する。
- 自分たちの議論を立て直す。
- 自分のチームが勝っていることを説明する。

注）それまでのディベートで触れられていない新しい議論を展開することはできない。

- ディベートの審査（ジャッジ）の方法
- 偏見を捨て、ディベーターと論題に対して中立な立場になる。
- メリットとデメリットの強さは、立論での証明（理由付けと証拠資料）の優劣で判断する。
- 相手チームからの反駁には、どう反駁したかを考える。
- メリットが少しでも上回る→肯定側の勝ち。
- デメリットが少しでも上回る→否定側の勝ち。
- まったく甲乙つけがたいという場合→慣習的に否定側の勝ち（最後の最後の手段）。

以上

肯定側メンバー&立論

馬場茜（4年）、前田啓介（4年）、姜雨淑（3年）、浅井遼（1年）、室屋友則（1年）

肯定側立論

現在、韓国と日本は日本海の名称に関して、国際舞台において対立しています。この原因は、1929年にIHO（国際水路機関）によって国際名称として、日本海と決定されたことに原因があります。この時、韓国は日本の植民地であったため、国際的な発言力がありませんでした。その歴史を背景に現在になり対立するようになりました。

この対立は現在、「どちらの名称が古くから使われた」、「どちらの方が多く世界で使われているか」といった同道巡りの議論ばかりで、平行線をたどっています。また、世界各国の名称を扱う出版社やメディアに、日本海単独記載か併記かに関して圧力をかけ、多大な迷惑をかけています。この状況を我々は日韓両国の国際的イメージの悪化、日韓関係の悪化といったデメリットであると考えました。これを防ぐために、日本海・東海の名称を統

一すべきであると主張いたします。そして、次のプランを提示します。

プラン1・2008年までに決定する。

プラン2・日本、韓国、北朝鮮、ロシアの四カ国において決定する。

プラン3・IHO・国連地名標準会議など、国際的に使用されるものとする。

プラン4・統一までは暫定処置として、日本海・東海を併記する。

そして、我々の提案として次の名称を主張いたします。

「緑海」 「ノクセ・パダ」 「ゼリヨニユイ・モール」 「GREEN SEA」

そして、プランを実行することによって次のメリットが生まれると考えられます。

メリット1 4カ国の友好関係が上がる。

まず、名称による対立のしこりがなくなります。現状としては、名称をどうするかといったことで気を使っています。例えば日本海単独記載となった場合、韓国側が不快な思いをし、それを火種として友好関係を悪化させているのが現在です。しかし統一されることで、不快になる機会が減り、より良いコミュニケーションが可能となります。これは、「どちらの名前が先か」、「通訳の直訳による間違い」、「印刷物に記載された名称による外交的圧力」などが解消され、気がねなくコミュニケーションが取れることを意味しています。コミュニケーションはよりよい関係を作っていく上で非常に重要なものです。それが気がねなくできるということは、名称による対立を防ぎ、友好関係の促進につながると考えられます。

メリット2 経済的効果が生まれる

日韓ワールドカップの際、日本・韓国どちらが名称が先かで議論になりました。この時、日本と韓国の二国間でそのため会議、通信、出張が行われました。この名称のために時間、労力、費用といった非効率がありました。

また同じように、日本海・東海においてもこのような非効率は存在します。しかし、名称を統一することによってこれらの非効率を解消することが可能となります。これは経済的効果であると考えられます。

さらに、別の観点から、プランにおいて世界的統一名称に変更されるのですから、日韓は足並みを揃えなければ、互いの関係を悪化させることとなります。これを防ぐために統一名称を普及させなければなりません。そのため、例えば地図・看板・パンフレットなどは改訂版を出さなければなりません。つまり、出版社、看板会社、印刷会社、流通業界といった場所で莫大な経済効果が生まれると考えられます。

また、新名称統一の新しいイメージを使ったブランド構築、統一名称を利用した観光政策などが可能となるとも考えられます。

以上の点から、我々肯定側は、日本海・東海の名称を統一すべきであると主張いたします。

以上

否定側メンバー&立論

足田利伸（4年）、尹熙峻（4年）、高橋隆太（3年）、佐藤恵（2年）、渡邊郁夫（1年）

否定側立論

私たちは東海・日本海の名称を統一することに反対します。それは次の 2 つのデメリットがあげられるからです。

第 1 のデメリットは、統一名を作るということにより、日韓の反発がおこるということです。というのは、国際水路機構の決まりごととして、「地名に関してお互いの努力により統一できない場合は併記を認める」ということがあります。ということは国際的な風潮として必ずしも統一名称は必要とされていないことが分かります。また、現在日本は「日本海」を、韓国は「併記」を主張しており統一名称を作ることは両国とも望んでいないことです。強制的に統一名称を押し付けるということは完全に現在の流れにそぐわないことで、このことを推し進めるなら日韓の国民は反発をおこします。

第 2 のデメリットは、アイデンティティーを喪失させてしまうということです。それは日本海・東海に慣れ親しんだ人々はもちろん、韓国には「東海市」という市もあります。また何と言つてももっとも重要なことは韓国の国歌に「東海」という歌詞があることです。国歌とは国民が母国を意識するもっとも身近な存在であり、また国の象徴の一つであると同時に国の誇りでもあります。このような重大なことを無視し統一名称を作ることは韓国人また日本人のアイデンティティーを否定し喪失されることにつながります。

そこで私たちは「日本海」・「東海」を永続的に併記すべきだと提案します。それは「併記」という手段は国際風潮の 1 つといえるからです。というのは、ドーバー海峡として有名なイギリス・フランス間の海域は、国際的な世界地図ではイギリス側の海域はドーバー海峡、フランス側の海域はカレー海峡です。また 2004 年 9 月に英国の世界大手といわれる教科書出版社の教科書で日本海・東海の併記がなされているということまた、以前まで「東海」を主張していた韓国が 1992 年から併記の提案をしているということから、日本も韓国の歩み寄りに応えるべきなのです。

そして私たちは 4 つのプランを提案します。1 つ、2008 年に行われる国連地名標準化会議において韓国側が「併記」の提案をします。2 つ、地図の表記に関して、韓国側の海域に「東海」と、日本側の海域には「日本海」と表記します。3 つ、表現に関して国際的なものには、国際慣習にのっとってアルファベット順に表現し、国内的なものに関してはその国の表現の自由を尊重して、自由にもらいます。最後 4 つ目として、併記することが決まれば国民に対してこれを PR します。

これらのプランを導入することにより、今よりも深い友好関係を築くことが出来ます。それはお互いの地名を認めること、国歌という国民としてのアイデンティティーの根本を尊重することにつながるからです。韓国、日本、どちらにも言えることですが、現状として、留学生や観光客が東海を東海と言えなかったり、また通じなかったり、「あれは日本海

だ」と訂正されてしまうことで、その人は個人または国民としてのアイデンティティーを否定された気になってしまいます。しかし、併記することで、自分の慣れ親しんだ東海を、また国歌にでてくる東海を認められるということがその人のアイデンティティーを尊重されたと感じ、また自分も他人のアイデンティティーを認め合うことで国民レベルでの強固な友好関係を築くことが出来るのです。そしてPR活動を通して広く国民に知られるのでこれらのような問題を防ぐことが出来ます。大切なことは名称を統一することではなく、このようにお互いを認め合うことです。それは国際協調を深め、これからの中の未来を明るくする一つの要因になるのです。

以上

議事録講評

文責：ディベート倶楽部「QCLC」 石原司

今回のディベートでまず評価したいのは、参加者全員が個人の主張をしっかりととしたことです。そのために多くの時間を割いて行ったりサーチも当日、それぞれの意見を主張するよい材料となっていたと思います。全体の流れも、論議が横道に反ることなく、論理性もあり大変に良いものだったと感じました。特に、経済面とアイデンティティーの論議は非常に良かったと思います。経済面では、利益と損失という点での意見の相違から、プランディング効果、新しい地図の出版コストなどいくつかの細かい例や提案を出しての論議が目を引きました。また、アイデンティティーについての論議では、日本海と東海の名称を統一することで、今まで一人ひとりが持っていた、日本海、東海というアイデンティティーを喪失するという否定側の論点に対して、受身な姿勢では何も解決しないという肯定側の主張はとても興味深いものがありました。中でも、私個人特に注目した点は、名称統一に伴って、韓国国家の歌詞にある、東海というフレーズを変更するのか、しないのかという論点で、これに対して、肯定側から変更しないことでアイデンティティーを守るという主張は印象的でした。

全体の流れは非常に良かったが、日韓の友好関係についての論議が目立たなかったこと、また、否定側からデメリットについての主張が少なかったことが、今回のディベートの残念な点だと思います。経済的損失、または利益についても、アイデンティティーについても、確かに大事な論点ではあるけれど、今回のディベートで最も論ずるべきは日韓、さらには名称問題に関係しているロシア、北朝鮮などの友好関係ではないかと私は思います。経済効果にしても、アイデンティティーにしても、結局は日韓それぞれの国内での利益によるところが大きく、国家間での友好関係という国際規模での利益を論議することがより大切であり、また聴衆も興味を持っていた点だと思います。否定側からも、日本海と東海の名称統一はアイデンティティーを喪失するから、統一せずに守るのだ、という論点で抑止の手段なく、アイデンティティーを喪失することの重大性、危険性をより論ずるべきだつ

たと思いました。

最終的には否定側に判断を下したわけですが、その最大の理由は否定側の立論でした。肯定側と否定側の論證は聞いていてほとんど互角だと感じました。ディベートの目的はあくまで論理的に相手を説得することですが、論理性で優劣を判断できない場合は、どちらがその論理を力強く訴えることができるか、聞き手を魅了できるかだと思います。その点で、今回の否定側立論は肯定側に勝っていたと感じたので、今回、否定側に判断をしました。しかし、本当に最後の最後まで、充実した論議だったと思いました。

以上

参加者感想

浅井 達（1年・アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ・ディベート俱楽部 所属）

「韓流ブームと日韓問題」

今日、韓国ドラマ、映画などが、とくに2002年の日韓共催のサッカー・ワールドカップ以降、日本で幅広い世代で人気を得ている。

とくにNHKで放映された韓国ドラマ「冬のソナタ」や「美しき日々」などは中高年女性を中心に高い人気を得ており、「冬のソナタロケツァー」・「美しき日々ロケツァー」などの韓国旅行ツアーは高い需要を誇っているという。まさに韓流ブームの到来だ。

また、島根県立大学は複数の韓国の大学校（大学）と交流協定を結び両国で相互の交流を行なっている。私がアンニョンハセヨ韓国文化研究サークルに所属していることもあり、島根県立大学へ5月から1ヶ月間、蔚山大学校生が、またその後2週間、慶道大学生が研修に来たとき友好的な交流を持つことができた。

私は夏休みには2週間、慶道大学へ島根県立大学の儒教文化体験プログラムに参加し訪れた。

慶道大学と同じ慶尚北道にあるテグ市で昨年アジア・ユニバーシアードが開催されたが、その際、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）代表も各競技に参加した。その時、現行の北朝鮮の政治体制に反対する市民団体と北朝鮮当局の関係者との間での衝突を見た。慶尚北道は方言がきつく、保守的な人が多いと聞いていた。このようなことがあり、私は慶道大学にいくにあたり反日的な人が多いのではないか、少なからずこんな不安を持っていた。

しかし、日本語のできない慶道生と仲良くなり、ほぼ毎日、焼酎を飲みながら英語で両国のアイドルや映画の話で盛り上がるなど、『反日』を感じない2週間だった。

上記のように韓流ブームも手伝って日韓の交流は盛んになっているが、日韓の間には靖国問題、教科書問題や竹島（独島）、日本海（東海）にみられる領土権・名称問題などの問題が依然解決されていない。

私がこの韓日共同ディベートのテーマが両国の微妙な問題で不安を覚えたこともあるが、参加した理由は韓流で無関心、避関心になりつつある日韓問題を考えたい、そして、知っ

てほしい、そんな思いが強かったからだ。

20世紀は日韓問題について自国の考え方をぶつけ合うだけで解決につながらなかつたと思う。21世紀は問題解決のためにニュートラルな政策も考察し、話し合える関係を築くことが大切ではないだろうか。同ディベートはその架け橋を築くきっかけに少なからずなつたのではないか。私は今後、アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブ、ディベート俱楽部「QCLC」をとおして日韓問題を考えていきたい。

足田 利伸 (4年・ディベート俱楽部「QCLC」副部長)

私は、今回のディベートを通して、いくつか良かったと思えることがある。

その一つは、対話を通して分析することの大切さである。私は、5月のメンバーで集まつた頃、ディベートには非常に関心があったが、「日本海・東海の名称を統一すべき」という論題について、問題意識もそれ程感じることがなく、関心があつた方ではなかつた。しかし、私は、今回のディベートの準備において、日本海の名称について、韓国人留学生から意見を聞き、韓国人の気持ちを考えることで、韓国側の立場から論題を考えてみた。日本海の名称が一般的である現在の国際社会において、東海の名称を使用する韓国人は、東海に隣接している韓国国民であるというアイデンティティーを傷つけられると知つた。4500万人もの韓国国民が、少なからずアイデンティティーにダメージを受けることは大きな問題である。これは、日本政府の伝える情報からは得ることが出来ない。これは、相手の立場に立つて考え対話することで得られた貴重な知識である。対話を通して相手の気持ちを考えることで、見えないものが見えてくると知つた。

また、メンバー同士の絆の深まりも良かったことの一つだ。難しい論題ではあったが、ディベートを成功させるために、メンバー1人1人がやる気と責任感を持ちつづけ準備し、お互いを助け合つた。このような中で、メンバー同士の信頼関係や親しみが増し、より絆が深かまつたと思う。

さらに、私はディベートをさらに理解することができた。私は、当日のディベート説明など何度かディベートについてプレゼンテーションをしたが、その準備段階において、新たな知識を得たこともあつたし、知識の再確認をしたこと也有つた。当日のプレゼンは、緊張して息苦しかつたが、ディベートの理解が深まりうまくまとめられたと思うので今となっては非常に良い経験であり、良い思い出だ。

今回のディベートにおいて、課題としていくつか修正すべき点は見つかったが、私個人としては、今回の海遊祭での日韓共同ディベートは、上出来だったと考えている。私は、この活動に参加して、上記のような価値あるものを得ることができたし、大きな達成感を感じることができた。今回の活動は、大学生活における約3年間のディベート活動におけるフィナーレとして、最高のものであると思っている。

今回のディベートのメンバーを含めこれまでお世話になった方達には、本当に感謝している。ありがとうございました。

石原 司 (4年・ディベート俱楽部「QCLC」所属)

「名称統一問題を論議して」

今回の共同ディベートを通して私は二つのことを学ばせてもらいました。一つは、お互いが価値観を共有し合うことの大切さ、もう一つは常識という枠の狭さです。

今日、グローバル化がますます進展し、社会環境が次々と変化しています。それらに柔軟に対応していくために、今後は一人ひとりがより広い視野、考え方を持つことが必要になります。今回学んだことは、私の視野と考え方を広げてくれる良い刺激になりました。これから社会は共存共生の時代だといわれています。その時代の中で、何より大切なのは、お互いの価値観をきちんと認め合うことだと私は思います。それによって、お互いの理解が深められ、お互いが人としてより成長します。もちろんその成長は、個人レベルのみでなく、コミュニティーレベルでも国レベルでも可能であり、また必要であると考えます。価値観とは一人ひとりが生まれてから、自分を取り巻く環境によって形成された個人の考え方、またはその人自身であって、それを形成する環境を変化させることは、その人にとって大きなストレスを与えます。日本海と東海を併記することこそ、お互いの価値観を認め合うことだと思います。併記はお互いがお互いの言い分をきちんと認めることが可能となり、それは価値観を共有するスタートラインに立つことだと思います。また、統一是常に争いを生みます。一方的に押し付ける統一はもちろん、お互いが統一を望まない状態での統一も、本質的にはお互いの価値観を認めることとはかけ離れています。統一是お互いがそれを望んだときのみ有効な手段だと私は考えます。無理に新しいものを創るのではなく、既存のものを認め合うことが、今後は必要だと今回のディベートから学びました。また、今まで常識だと思っていた、日本海の名称が、少し視野を広げてみればまったく常識ではなかったこと、自分達が持っている常識が如何に狭いものかをディベートを通して勉強しました。常識に囚われることは、その人の視野を極端に狭いものにする危険性があると感じました。今後ますます激しくなる社会変化の中、常識に固執することは、その変化を受け入れる柔軟性を奪ってしまいます。先に話した価値観の共有も、常識という狭い枠で考える限り、不可能なことだと思います。今後は常識という枠に囚われず、常に違う視点からものごとを見る姿勢を持ち続けたいと思いました。

最後に、今回、韓日共同ディベートに参加できること、また参加するチャンスを与えていただいたことに感謝したいと思います。このディベートを通して学んだことは、私にとって、非常に有意義なものだったと思います。今後は、今回のことをただ学んで終わることのないよう、実行するよう努めていきたいと思います。日韓共同ディベート、本当に疲れ様でした。とても楽しかったです。

姜 晴淑

(3年・ディベート倶楽部「QCLC」所属)

『韓日共同ディベート』を終えて

今年5月に、尹さんから日本海・東海の名称問題について『韓日共同ディベート』と一緒にやってみないかと声をかけられたとき、最初は遠慮しました。その理由は、島根県の交流留学生として、両国の敏感な問題に関わりたくないという気持ちもありましたし、また、女性としても周りの視線が気になったからです。その時、尹さんが「もし、姜さんのように、みんなが逃げ出したら、日韓の問題はいつまでも足踏みになってしまふんじゃないか。私たちが問題意識をもって民間交流の柱である大学で日本人学生と考えてみよう。今こそ、留学生である私たちの使命を果たすべきじゃないか。勇気を出して一緒に頑張つてみましょうよ。」という言葉が私の心を打ちました。そこで、5月から企画に参加するようになりました。しかし、外国人としての言葉の壁と、論理的に話す自信もなかったので、途中でやめたいという弱い気持ちをもつたこともありました。しかし、いろんな不安が少しづつ解消され、だんだん楽しくなりました。それは、一緒に勉強していくうちに、分からなかつたことが理解できるようになったからです。そして、ディベートがどういうことかも知らなかつた私に、寺脇さんをはじめ、日本の学生たちが言葉の使い方やディベートのやり方を親切に教えてくれました。時間が経つにつれて私は自信がもてるようになりました。

夏休みが終わるところで、チームが肯定側と否定側に分けられました。私たちは自分に与えられた役割に最善を尽くしましたし、いつの間にかそれぞれの考えが韓国人であれ、日本人であれ、それは問題ではなくなきました。私たちの考えは一つになっていきました。

今、考えてみるとすでに、そこから真なる交流が始まったのではないかと思います。

今回の日韓交流ディベートのきっかけで、誰にでもできる当たり前のことから出発し、だれにもある当然の不安を、一步一步形を変えていくことが留学生である私と現代の日韓の大学生に与えられた新しい使命であることが分かりました。

そこで、「新しい共同体意識」が必要だと思います。歴史問題を歴史問題として論争してみても、領土問題を領土問題として論争してみてもなかなか解決は見えません。しかし、「新しい共同体意識」が誕生すれば、その問題も徐々に解決されていくでしょう。その「新しい共同体意識」は民間交流である日韓の大学生から始めることができると思います。とりわけ、総合政策学部で学んだ広い視野を一つの事柄に対して多角的に考えて、その考えを伝え、交換することだと思います。将来、韓日の間で関税がかからずに入人の往来が自由に行われ、先ほど申し上げているような状況が生まれたときに、日本海・東海がどちらのものかというようなことがそれほど深刻な問題にならないのではないかでしょうか。

大学祭が終わった今、私はみんなに次のように話しかけたいです。「共同体意識をもつて日本海・東海の問題を分かち合ったからこそ、相手に対する理解や思いやりが持てるのでしょうか。」と。そういうものが困難な問題も解決していくだろうと私は信じています。

佐藤 恵 (2年・アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブ・ディベート俱楽部 所属)
「韓日共同ディベートを通して」

アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブの間に竹島問題について韓国の留学生とディベート俱楽部とで話し合おうというメールが流れてから、今回の韓日共同ディベートを開催するまで、あっという間に五ヶ月が経った。

この活動に参加した理由は、韓国の留学生が竹島問題についてどのような考えを持っているのか知りたかったからである。そこで、初めて日本海・東海の名称問題について知ることとなった。今まで日本海は、どこの国でも日本海と呼ばれていると思っていたので、この事実を知ったときは驚いた。

そして、海遊祭におこなうディベートの題材をこの名称問題に変更し本格的な活動が始まった。ディベートはゼミの一環として何回か経験したことがあったが、情報を持つても、それをなかなか自分の意見にすることのできない私は毎回失敗の連続だった。そんな私だったが否定側の立場になってから日本海・東海について資料を集め、何回かこの名称問題について肯定側と否定側が集まってディベートを繰り返し、指摘されたことをメンバーと共に議論していくことがとても楽しかった。

この活動を通して、一つの物事に対して大勢で議論することによって他の人の意見を聞くことができ、それから自分なりにまた考えられるようになったことは私の中で一番成長できた点だと思う。また、自分の意見を自信がなくても主張することにより以前より積極的な自分になれたと思う。今後ディベートを重ねる上で、相手の意見を聞き素早く分析理解し、論理的に即座に返答できるような力を身につけたい。

また、ディベートだけではなく韓国についても新たに学ぶ点があった。現代、日本では「冬のソナタ」など韓国のドラマにより韓流ブームがおこり、韓国では2004年元旦に日本文化が全面的に開放されたことにより、日韓両国の距離はグッと縮まっていると言える。しかし、こういった面も存在すると共に日韓の間には竹島問題や今回挙げられた日本海・東海の名称問題、日本の教科書問題など様々な問題が存在している。こういった問題、日本が辿って来た歴史を現代の日本人はどれだけ知っているのだろうか。このようなことを知っている日本人は少ないのではないかと考える。今後、日韓がますます友好関係を築く上で、日韓の間にある問題や辿って来た歴史を知っておかなければならぬと改めてそのように思った。

一緒に活動してきた11名の皆さんへ

今回、皆さんと一緒に活動できて本当に良かったと思います。今まで大学生活を送ってきて一番、達成感を感じることができました。まだまだディベーターとしては未熟な私ですがこれからもよろしくお願ひします。

佐藤 恵

高橋 隆太 (3年・アンニヨンハセヨ韓国文化研究クラブ所属)

私は現在授業で韓国語を学んでおり、また日本と韓国を含めた東アジアの歴史や国際関係にも関心を持っている。現在の日本、韓国、北朝鮮、中国、ロシア沿海地方など、北東アジアと呼ばれる地域は、古くから政治的、経済的、文化的に交流があった。それは多くの面で発展をもたらしてきたが、歴史の中では争いや国際的問題も発生し、現在でも解決されていない問題も存在している。

私はそのような歴史や問題についてより深く理解し、現代の世界や将来への課題を探りたいと考えていた。

このようなときに、今回の企画についての知らせを受けたことがディベートに参加するきっかけだった。

さて、今回のテーマは日本海の名称問題についてであった。これは日本で日本海と呼ばれている海が、韓国では東海と呼ばれ、諸外国でも表記に違いが出ているということであるが、一般的にあまりなじみのない問題ではないだろうか。私自身、この問題について少し聞いたことがあるだけで、あまり深く学んだことはなかった。しかしこの問題を含め、現在日本と韓国との間で歴史認識の違いによる対立がある。

両国の良好な関係の構築、そして相互発展のためには、双方の歴史や社会の状況を正しく認識する必要がある。そのうえで正しい認識・理解をしなければならない。今回の日韓のディベートに参加し、問題についての情報を集め、話し合ったことは、現代の日韓関係について理解し、これから社会を考えていくきっかけになったのではないかだろうか。もちろんこのことは、現代の歴史問題の一部ではある。しかし今回の企画を通して知識を深めたことは、韓国の社会や考え方を理解していくための要素として意義深いものであったように思われる。

また今回の企画によって始めて大きな場でディベートを行うという経験をした。海遊祭の準備のため、私たちは事前にディベートの練習や資料集めを行ってきた。

このような体験を通じ、人前で自分の意見をまとめ、発表することや、相手に意見を説明することの方法やその難しさを学んだ。これは簡単なことではないが、これから生活や仕事を行うためにも必要なことであろう。このような意味でも今回の体験は意義があったように思える。

今回の活動を通じて、私は日本と韓国の歴史をめぐる問題についての理解を深め、また討論の方法についても学ぶ、良い機会であったように思う。

日本と韓国は近い距離にあり、様々な面で交流が行われているが、複雑な問題も抱えている。両国の往来が活発になる中、一般市民も両国の正しい歴史や社会を理解することは重要だと考えられる。今回のディベートは、このきっかけになったのではないか。これから学習や生活を通じ、国際関係や歴史についてもっと知り、外国事情についての理解を深めたいと思う。

寺脇 史人 (4年・企画運営責任者・ディベート俱楽部「QCLC」部長)

私は、今回の韓日共同ディベートに参加できたことを誇りに思うと共に、幸せに思っています。そして、この企画に関わる多くの方に感謝しています。特に、韓国人留学生の尹熙峻君には、ディベート俱楽部の引退を飾るこのような素晴らしい企画を提案してくれたことを非常に感謝しています。また同じように、不甲斐ない私の企画運営を支えてくれたディベート俱楽部部員一同、アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ部員一同、本当にありがとうございました。人間一人では何も出来ないということを、皆とやってきて深く再び実感することが出来ました。

さて、今回の企画は、日本と韓国の中間に存在する一つの問題を、日本人学生と韓国人留学生が共に、半年間真剣に議論を積み重ねてきました。これは県立大学にとって大きな意味を持つ第一歩であると考えられます。今現在、県立大学内には多くの愛好会・サークル・クラブが存在します。しかし、このような留学生と日本人学生が共に、アカデミックな問題を議論する組織・企画は非常に少ないです。島根県立大学には、日本・韓国・中国・ロシア・モンゴルを専門とする先生方、北東アジアに関する論文が多く所蔵されているメディアセンター、そして留学生など、北東アジアの善隣関係を議論・研究していくのには最高の環境が整っています。今後この環境を学生が今以上に活かし、私たち4年生が卒業した後も、後輩たちの手によってこのような留学生と日本人学生による共同企画が、開催されていくことを祈っております。また、そうすることが大学の建学の理念である「諸科学の総合と社会における実践」の具体的な形の一つにもなると思います。そのような意味で今回の韓日共同ディベートは、今後の島根県立大学において留学生と日本人学生が、共同で何か企画していく上での大きな参考になると思います。

最後に私は今回の企画をもってディベート俱楽部「QCLC」を引退します。4年間ディベートを通じ論理・弁論と言うものが何なのかを考えました。そんな私が考えてきた核心をつく言葉に最近出会えたので、この場をかり紹介したいと思います。

「論理・論理的思想は簡単でいくらでも聞ける。だが、古来より聞き難きものは道なりと言ひ、道理・真理となってくると實に難しい。なかなか考え難い、言い難い、解し難い。われわれが生きてゆく上に於て先づ目を開かなければならぬことは、この問題である。」

安岡正篤『人間としての成長』より

つまり、私は今まで論理・論理的思想を追い求めていましたが、私自身が本当に追い求めなくてはいけないことは、道理・真理であるということが解りました。この言葉こそ、私が4年間ディベートを通じて得た真理であると思います。また、今回の韓日共同ディベートにおいても、名称問題の解決法の真理に近付くことができたと考えています。今後は、仕事など実践を通じても、人生における真理・道理を追い求めて行く所存であります。そして、ディベート俱楽部「QCLC」を引き継ぐ後輩たちもこの言葉を肝に命じて、ディベート俱楽部「QCLC」の活動や県立大学を盛り上げて頂ければ幸いです。

馬場 茜 (4年・ディベートクラブ「QCLC」所属)
「活動を終えて」

2002年8月、異文化理解研修でアメリカに行った時の事だった。学校の廊下にはあってある世界地図の「Sea of Japan」の文字はペンで消され、「Sea of Korea」と書き直されている。私にとって「日本海」は当たり前でも、違う背景を持った人が見れば「日本海=日本の海」と捉えて不快に思う人がいる事を知り、ショックだった。思い起こせば2年前の時点で、私はアメリカでこの問題に出会っていたのだ。

縁あってこの韓日共同ディベートに、私はディベート倶楽部「QCLC」の一員として参加する事になった。前半の活動では就職活動やバイト・他のサークルとの兼ね合いで、なかなか参加できなかつたため、議論についていくのが精一杯でメンバーには迷惑をかけてしまった。

議論を本格的に始めるまで、私は心の中では韓国側の主張に多少疑問を持っていた。それは、外務省やインターネット上にある日本語の情報だけを収集し、日本側の主張だけしか頭の中に入れていないという落とし穴であった。近年になって世界中に東海という名称をアピールして併記を求めている韓国側の主張に関しては、図り知ることは難しかつた。

しかし、この活動が面白い物になつたのは、日本語を学んでいる留学生がいらっしゃつたからだ。友人が海外で働いている日本人に話を聞いた時、「言語がなければ真のコミュニケーションはできない」と言い切つたそうだ。確かにちょっとした会話ならジェスチャーで事足りるかもしれないが、自分の考えや主張を正確に相手に分かってもらう為には、両者共通の言語を使って、誤解の無いよう選んだ言葉で表現しなければならない。

留学生の方々は韓国側の主張の理由を、韓国の今の流れを、心の奥底にある気持ちを日本語で表現してくれたからこそ、両者の主張に納得でき、「名称統一」という次の議論に進む事が出来たのではないだろうか。

スタートは出遅れたけれど、本番当日は自分なりに充実した議論が出来たと感じている。終わってから「もっと議論を続けたかった」という願望が湧いてきたのである。肯定側はリサーチ不足・相手側反駁への対策不足・そしてメンバーと議論を深める時間が少なかつた事が敗因だった。聴衆の皆さんにはもっと聞いて頂きたい事がある！その思いが「もっと議論がしたい」という気持ちにさせたのだろう。

私は改めてこう思った。ディベートは勝ち負けだけが重要なのではない。自分の考えを越え、色々な視点で物事を見て、どれだけ論題について考えを深める事が出来るか。そしてその考えを聴衆に問題提起できるかということが重要なのである。そのきっかけがディベートというものではないだろうか。聴衆の方々はどんな事を感じたのだろうか。確かめることは出来なかつた。でも、ウンさんの最後の言葉に対して大講義室に大きく響き渡つた拍手を、私は信じたいと思う。

前田 啓介 (4年・アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ所属)

2004年10月16日(土)、島根県立大学第5回海遊祭で日本海と東海の名称を統一するか否かについてのディベートを行いました。メンバーは、ディベート倶楽部「Q・C・L・C」、韓国からの留学生、学生有志、そして、私を含めた「アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ」で構成されています。

今回の論題となった日本海・東海の名称問題、このディベートに参加する以前から知つてはいたのですが、この問題について今回のような形で、しかも留学生を交えて議論するのは初めてのことでした。

当日、私は新名称統一を提案する肯定側につきました。日本海という名称が定着している日本においてはあまり知られていませんが、現在、日本と韓国は、日本海・東海の名称について対立しています。どちらの名称が多く使われているか、早くから使われていたかという両政府の調査も日韓で違うため、ひたすら水掛け論を行っているという状況です。

最近、日本では韓国ブームが到来し、韓国俳優の受け入れや、韓国へ旅行する人が増加しています。しかし、それらの良い面ばかりが目立ってしまい、歴史的な問題などはどうしても隠れがち（と言うか、見ないようにしている？）です。今回、留学生および「QCLC」から名称問題についてのディベートの話を持ちかけられた時、素直に良い機会だと思うことができました。ディベートに関しての経験は浅いので、その辺の心配ではありました、「QCLC」の皆さんから指導を受けるなどして、未熟ながらも徐々に技術をつけていくことができました。

海遊祭当日は、それまでの練習よりよく議論できたのではないかと思います。しかし、否定側から出された問題に対して触れることが出来なかったなど、やはりまだ未熟なものでした。今回のディベート参加メンバー全員の共通意見としては、「国際統一名称を提案する」ということにあります。肯定側の準備不足というのもあったのですが、それでも肯定側が勝利を認められなかったのは悔しかったです。

しかし、今回のディベートに参加することで得られたものは大きかったです。資料を集めるうちに日韓両国政府の調査状況なども分かり、名称問題がもたらしている現状や、他の国との名称問題にも突き当たりました。日韓関係の良い面だけでなく、障害となっている問題を深く調べる良い機会になりました。また、ディベートを使った今回の討論、論理的に話し聞き手を説得するという技法は、将来的にも役立ちそうです。なかなか難しかったのですが、資料の重要さ、話し方など、知ることは多かったです。

日本海・東海の名称について話し合った今回のディベート、何より1年生が積極的に参加してくれたことが嬉しかったです。ほとんど留学生の尹さんと同じ部屋の学生でしたが、こういった国際問題に关心を持ち、ディベートに参加しようという姿勢を見せてくれたことは、今後の島根県立大学としても喜ばしいことなのではないでしょうか。今後もこういった機会が設けられるかは分からないのですが、もし機会があるなら是非積極的に参加して欲しいと思います。

室屋 友則 (1年・ディベート俱楽部「QCLC」所属)

私は大学に入ってこのような経験をするなんて、入学前には思いもしなかったことであり非常に貴重な経験をさせてもらい感謝しています。5月頃、尹さんから紹介されてこのサークルがあることを知りました。私は緊張していましたが、皆さん優しく迎えてくれたのを覚えています。ましてディベートなんて1・2回くらいしかやったことがなかったのですが、基礎の基礎のから分かりやすく教えてもらいました。

日本海と東海名称統一するか併記するかというテーマが決まったとき、身近な問題ではあるが知識や認識が薄かったというのが本当のところです。しかし自分なりには、インターネットや書籍などで調べたつもりです。そこで今まで知らなかつたことなどがすこしづつではありますが理解できるようになりました。これまでの経験の中で、きちんと考へる機会はありませんでしたので今回の機会は本当に自分にとって勉強になりました。夏休みも終わりいよいよ、海遊祭が近づくと組決めも決まり両軍ともに士気が高まって、みんなで集まってひとつの目標に向かって一生懸命になっていました。海遊祭の2週間前には尹さんの会社の小松昭夫社長さんと話をする機会もありました、そこでは、日ごろ聞けないことも耳にすることことができました。

そしていよいよ海遊祭がやってきました。私はこの問題のプレゼンテーションをすることになりました。たくさんの人の協力を得て原稿を完成させることができました。そして説明は何とかすることができました。ディベートでは一回発言しましたが、もうちょっと発言できたのではないかと思いました。

このディベートをやった感想は本当にいい経験をさせてもらったということです。またもう一度この問題について自分から調べてみようと思いました。最後にこのような体験をさせてくれた、寺脇さんをはじめ多くの人に感謝したいと思います

尹 熙暎 (4年・韓日共同ディベート企画立案・総合責任者)

『韓日共同ディベート』を終えて

今年5月に『韓日共同ディベート』を企画してから、みんなと悩んだり、喜んだり、助け合ったりして、ようやく10月16日の学園祭で『韓日共同ディベート』を無事に行うことが出来ました。最初にこの企画を考えたときにはうまくいけるかと心配もありましたが、みんなの力を信じて今日まで歩んでくることができました。

この企画を立ち上げるにあたり、きっかけを与えてくださった方がいました。その方は小松電機産業株式会社の社長でいらっしゃる小松昭夫氏でした。小松社長は「今、あなたの立場を考えてみなさい、日韓友好関係と世界平和のため問題意識を高め、みんなと話し合って議論することができる絶好の立場ではないか」そして、「変化というのは他人が変わってくれるものではない、自分の力で変えることに真の意味がある」などとお話を聞かせて

いただきました。正直にその時まで、私は留学生という立場であり、日本の方とのトラブルや議論に巻き込まれたなく、日韓の間の問題意識を抑えてきたのが事実でした。そんな中で、聞かせてもらった小松社長のお話は私が今まで忘れてきた、留学生の本分の役割を見つめ直させてくれましたし、また、新たな自分を発見させてくれました。

そこで、その気持ちを忘れずに、日本人学生と『韓日共同ディベート』を企画するようになりましたし、それによってお互いの問題意識を高めたいと思いました。幸いに良い仲間ばかりと出会い、国境を越えた友情まで得ることができて、人生の中でこれ以上のプレゼントはないと思います。最初から今まで共に頑張ってくれたメンバーたちにはこの場を借りてお礼を申し上げたいです。本当にありがとうございました。そして、これが終わりではなくこれからまた、新たな問題意識に向けての出発点になってほしいです。

最後に今回の『韓日共同ディベート』を自分なりに評価してみたいと思います。

一良かった点：

- ①日韓の大学生が一つの問題意識をもって一緒に悩み、努力するうちに共同意識もち、新たな文化の形成を生み出す希望を見付けたこと。
- ②お互いの立場と主張を知ることができ、それに対する対応策とこれから進むべき道が見えた。
- ③『韓日共同ディベート』を通してもっと多くの方々が、このような問題に興味を持ってくれたので、もっと幅広いネットワークを築くことができた。
- ④一生の忘れない永遠の仲間を得たこと。

一反省点：

- ①本番の時、無意識の中に勝負心理が高まり、細かい問題をしつこく攻撃し、幅広い議論になれなかった。
- ②メンバーの中で、自分の意見に対して遠慮すぎて、あまり発言できなかつた人がいたので、バランスある発言ができなかつた。今度からはもっと自信をもつて発言できるように訓練が必要である。

—以上—

渡邊 郁夫 (1年・ディベート倶楽部「QCLC」次期部長)

今回、私が韓・日共同ディベートに参加させてもらうきっかけになったのは、企画者である尹(ユン)さんから私もこの企画に参加してみないかと誘っていただいたことです。私はアジアにおける諸外国の関係と平和について興味がありました。初めこのお話を尹さんからされたときに私は悩みました。なぜなら私は韓国と日本の関係についてそれほど詳しい知識は持っていましたが、大学に入りたての私なんかがそのように大きく、またシビアな問題に首を突っ込んでいいものなのかと考えたからです。私は一週間以上考えた結果、参加させてもらうことになりました。それは、尹さんの韓国、日本に対する想い

の深さを知ったことと、私自身、失敗を恐れ何もできないような態度ではこれから先も何も得ることはできないという考えに至ったからです。現在おかれている状況をしっかりとと考えた上で失敗を恐れることなく挑戦しようと思いました。

この企画に参加させていただくことにしてから実践的なディベートの練習と日韓における歴史的な事実を確認するという作業が始まりました。初めのうちは「人に見せられるようなディベートはできていない。」とディベート俱楽部部長の寺脇さんに指摘されていました。初めてのこと當然と言えば当然ですが、そのようなことも言つてはいるほど時間は余ってはいませんでしたから、私は相当焦っていました。しかし本番まで何度も何度も練習を重ね、きっちりとしたディベートをすることができました。また立論まで任せていただいき、なかなかよいものをつくれたことは偏に気を長くご指導をしてくださったディベート俱楽部の皆さんのおかげでした。

また、10月に入りチームに分かれて会合を開くようになってからは石原さんや足田さん、尹さんがチームをひっぱり、私はただただついていくことに必死だったように思います。本番ではより深いディベートにしようと私も精一杯討論させてもらいました。結果として私は大変満足しています。この何事にも変えがたいほど貴重で、楽しい時間をみなさんと共有できたことはいつまでも私の心の中で輝き続ける大事な記憶となるでしょう。これまで私を支えてくださったみなさま、大変感謝しています。みなさんとともにこれだけのものを作り上げることができたことを幸せに思っています。この経験を無駄にせず、私は私らしい人生を歩み、外の世界にあるものを掴みとっていると考えています。

最後に、今回私にこのような機会を与えて下さった尹さんにお礼を言わせていただきます、どうもありがとうございました。

おわりに

今回の日本海・東海の名称問題に関するディベートは、島根県立大学で初めて留学生も交えたディベートとなりました。そのため、学生間でこういった問題を扱うということは、北東アジアに焦点を置く本大学の方向性に沿った論題だったのではないか。また、今回のディベートに参加したメンバーはもちろん、当日聴きに来てくださった聴衆の方々にも何かしら心境の変化があったことと思います。少なからず、今回取り上げたような名称問題が現実にあるのだということを意識し、関心をもっていただけたのならば、メンバー一同嬉しく思います。

最近は韓国ドラマなどの影響により韓流の波が日本に到来し、日本人も韓国人や文化に興味を抱いてきています。しかし、実際には今回取り上げたような日本海・東海の名称問題、竹島（韓国では「独島」）などの歴史的な問題が未解決のまま残され、日韓関係に悪影響を与えていたという現実もあります。こういった問題を^{ひがし}ろにしていては本当の友好関係は築けないと考えます。そこで私達は、今回のディベートを通じて日本海・東海の名称統一を提案しました。

今回は韓国人留学生2人を交えてのディベートとなりましたが、今後もこのような他国の学生を交えて国際問題解決の糸口を探る企画が、ここ島根県立大学で盛んに行われるこことを期待します。

最後に、この文集を最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。また、協力してくださったたくさんの皆様、当日ディベートを聴きに来てくださった聴衆の皆様にも感謝の意を表明し、おわりの言葉とさせていただきたいと思います。

アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ

前田啓介

参加者一同

(本番後に大講義室にて撮影 撮影者：田中輝美様)



島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科

第5回海遊祭 韓日共同ディベート「日本海・東海の名称を統一すべきか、否か」報告文集

韓日共同ディベート参加者一同 発行者

馬場 茜 表紙

2004年10月26日 発行

2004年(平成16年) 10月16日(土曜日) 山陰中央新報



県立大

論争続く「日本海」呼称問題

日生の書

が続く「日本海」の母称問題をテーマに、田韓の大学生が十六日午前十時半から浜田市野原町の県立大で公開ディベートを開く。「日韓両国がお互いを救えるのか」「なぜなれど」とスケベークは熱い願いを込めてい

計二人。「対立のままでは不毛。日韓の膠着橋になりたい」と韓国出身の四年生尹熙俊さん(二年)が発案、五月からの準備を進めてきた。

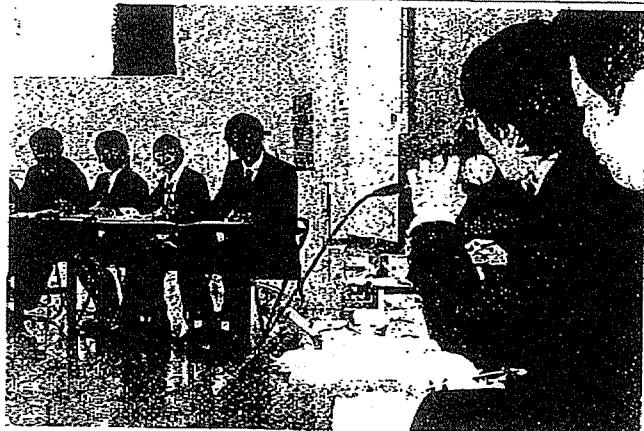
日本海呼称をめぐる
は、韓国は植民地半島の
の結果と主張し「倭寇」
日本海の呼称問題をハ
マに本番前から意見を教
わせる学生

県立大学園祭

日本海呼称テーマに

日韓学生が公開討論

東日本大震災の際に、多くの学生が「東海」を「東日本」に改名する運動を行った。この事件は、地名統一運動の一環として、多くの議論を呼び起した。一方で、韓国では「東海」を「東洋」と改名する運動があり、これは韓国側の主張である。この問題は、韓国側の主張を支持する者と反対する者との間で論議された。会場には四十人ほどの聴衆がおり、個人の考え方による多様な意見が交わされた。また、地図や看板などの改訂も行われた。



「日本海」の名称統一の肯定側と否定側に分かれ、活発に意見を戦わせる学生たち

否定側に軍配が上がった。企画した同大ティベート俱楽部「Q.C.L.」の寺脇史人部長(33)は「盛り上げていくもつかは留学生と一緒になつぱになつたのです」と語り、「企画した。日韓関係を」とした。

浜田市野原町の県立大で
十六日、大学祭「海遊祭」
が始まり、初日は、日韓で
論争になっている「日本海」
の名称をテーマに、両国の
学生が大教室で公開討論を
繰り広げた。

韓国側は、日本海という
名前が「植民地時代に世界
で使われている「東海」
か日本海との併記を主張。
これに対し日本側は、「十
八世紀から世界地図で

浜田市野原町の県立大で
十六日、大学祭「海遊祭」
が始まり、初日は、日韓で
論争になっている「日本海」
の名称をテーマに、両国の
学生が大教室で公開討論を
繰り広げた。

韓国側は、日本海という
名前が「植民地時代に世界
で使われている「東海」
か日本海との併記を主張。
これに対し日本側は、「十
八年で

日本海？ 東海？

名称巡り公開討論

統一か併記 学生熱弁

県立大学祭



日本海の名称について主張する学生ら（浜田市の県立大で）

『日本海』という名称が使
われている」と反論し
ている。

討論は同大の韓国人留学
生が発案し、ティベート俱
楽部や韓国文化研究クラブ
などの協力で実現。「日本
海・東海の名称を統一すべきか否か」とのテーマで、
韓国人留学生一人と日本人
学生八人が肯定と否定に五
人ずつ分かれ、双方に留学
生が一人ずつ加わった。

肯定側は「二〇〇八年ま
でに『緑海』という名称で
併記する」と主張。友好関
係が築け、観光客増などの
効果も見込まれるとした。

一方、否定側は「永続的

長の四年寺脇史人さん（22
歳）は、「微妙なテーマだった
が、日韓関係を考えるきっ
かけになったのでは」と話
していた。同祭は十七日まで。

討論後、会場で握手によ
る判定では、否定側が優勝
した。ティベート俱楽部
では本当に意味で友好関係
は生まれない」と強調し
た。

石見

浜田支局

〒697-0027
浜田市殿町17
の3 日本興業
浜田ビル4F
☎0855-22-1101
FAX 22-1102

松江支局

〒690-0636
松江市母衣町
95の1
☎0852-23-1411
FAX 23-1413

通信部

大田 0854-82-0451
益田 0856-23-7331
出雲 0853-22-3388